

ウメの樹体ジョイント仕立ては 6年生樹で成園並み収量が得られる

ウメ栽培は年間労働時間の40%近くを収穫作業が占めており、低樹高化による収穫作業の効率化と安全性の確保が望まれています。そこで、樹体ジョイント仕立てをウメに応用することで、安定生産と低樹高化による軽労化を同時に図る早期成園、省力・安全栽培技術を開発しました。

☆ 技術の概要

1. ウメの樹体ジョイント仕立ては、定植1年目に高さ50~60cmに苗木を水平誘引し、先端部と隣接樹基部を接ぎ木して主枝部を完成させます。その後、発生した新梢を2年間育成し、3年目から中、短果枝を中心に果実を結実させ、早期成園化を図ります。
2. 収量は、6年生の青ウメ用品種‘白加賀’では1479kg/10a、同樹齢慣行樹に対して5.8倍、梅干し用品種‘南高’でも2526kg/10a、同樹齢慣行樹に対して2倍の収量が得られます。18年生成木との比較では、‘白加賀’で1.2倍、‘南高’でも同等の収量が得られます。
3. 樹体ジョイント仕立ての‘白加賀’は、着果過多の傾向が認められ、2L果以上の割合が低くなります。‘南高’は2L以上果の割合が90%近くになり、慣行成木と同等の果実肥大です。
4. 樹体ジョイント仕立て4年生の収穫始めから3年間の累積収量は、生産性の低い‘白加賀’については成木の126%、同樹齢樹の645%、豊産性の‘南高’についても成木の85%、同樹齢樹の283%の収量が得られます。



写真1 ウメの樹体ジョイント仕立て(6年生樹)

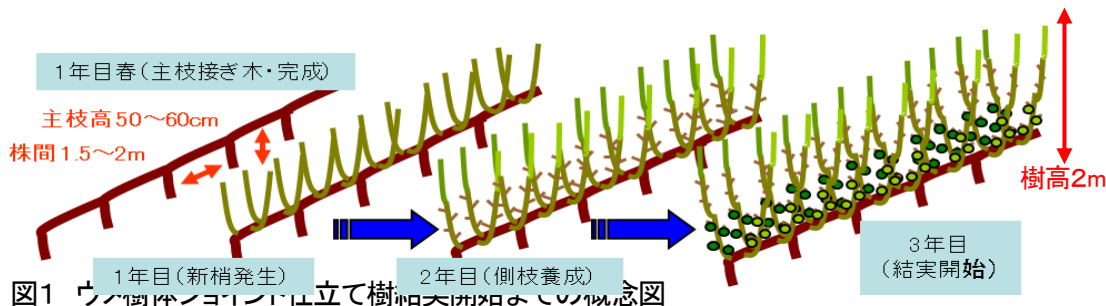


図1 ウメの樹体ジョイント仕立て樹相形成過程の概念図

☆ 活用面での留意点

1. 樹体専用苗の育苗は、1年生苗を60cm前後に切り戻し、ナシと同様に先端から2本の新梢を2m以上伸ばす手法で行いますが、‘南高’に対して‘白加賀’の生育はやや劣るため、尿素の葉面散布処理等により初期生育を促進することが重要です。
2. ‘白加賀’の着果過多に対しては、収穫の遅れる側枝基部を中心に慣行基準と同様に摘果を実施します。低樹高化により脚立を使用することなく安全で効率的な摘果が可能です。
3. 詳細については、神奈川県農業技術センター・生産技術部（電話：0463-58-0333、内線331、電子メール：nogi.gijutu@pref.kanagawa.jp）にお問い合わせください。

(果樹研究所 企画管理部 研究調整役 岩波 徹)